



〈紹介〉 趙清閣の編集による刊行物二つと新たな筆名の発見

金, 伝勝
濱田, 麻矢

(Citation)

未名, 42:47-63

(Issue Date)

2024-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100504951>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100504951>



〈紹介〉

趙清閣の編集による刊行物二つと新たな筆名の発見

金 伝勝

濱田麻矢 訳

趙清閣は中国近代に名を知られる女性作家であり、画家であり、また傑出した編集者でもある。六十年にも及ぶ文藝活動の中で、人口に膾炙した作品を多く生み出しただけでなく、『女子月刊』『婦女文化』『彈花』『神州日報・原野』『北方日報・九九文学双周刊』などを編集したほか、『彈花文藝叢書』、『中西文藝叢書』また『黄河文藝叢書』などの叢書も編集している。二〇二〇年に陳軍教授が『趙清閣文集』全十二巻を北京朝華出版社から刊行したが、第十巻及び第十一巻には趙清閣が抗戦期間に創刊した大型の文藝刊行物『彈花』が完全収録されている。こうした体裁は個人の作品集の編集出版では例外的なものだが、文藝編集者として稀有な才能を示した趙清閣の貢献をよく再現するものだ。民国期の文献は膨大な数にのぼるし、趙清閣の一生は紆余曲折に富んでいたため、手稿や資料には散逸したものが多い。趙清閣の平生の著述活動について、学術界の評価はまだまだ定まっていなかったところがあり、さらには無責任なゴシップ報道も多くみられる。本論は趙清閣が編集した二つの刊行物の経過を明らかにすると同時に、今まで知られていなかった彼女の筆名を指摘し、文献資料から趙清閣研究に新たな観点を提供しようとするものである。

一、『河南民報・女子文藝』 趙清閣編集生涯の起点

一九三三年七月十五日、上海『女子月刊』第一卷第五期に、編集長の黄心勉に宛てた趙清閣からの書信二通が掲載された。それぞれ「一定会受鼓勵而振興起来（きつと励ましを受けて奮起してみせる）」「婦女或則會被你們的刺激而覺悟（女性はあなたたちから刺激を受けて覺悟を決めるかもしれない）」と題されたものだ。初信で趙清閣は黄心勉に自己紹介し、『民国日報』副刊編集長として『婦女周刊』を編集しているほか、『鄭州日報』の『她双周刊』の編集長もしています」と書いている。前者の『民国日報』とは『河南民国日報』を指すものだ。第二信では「本省府の清（趙清閣自身のこと。筆者注）が編纂した『政治月刊』を寄贈しようと思いますが、受け取ってくださいますか」と聞いている。⁽³⁾この『政治月刊』とは『河南政治月刊』のことだが、表紙に書かれたタイトルは『河南政治』となっており、一九三一年九月に開封で創刊された。最初は河南政治月刊編集處が編集発行していたが、第二卷第二期より河南省政府秘書處が編集発行しており、編集者の名前は具体的には記されていない。この雑誌は政治刊行物で文藝作品の掲載はごく少なく、趙清閣はただ「文藝」欄の編集を担っただけだっただろう。さらに一九三三年四月の第三卷第三期に、趙清閣は詩歌「価値的美（価値の美）」を発表している。同年九月十五日、『女子月刊』第一卷第七期の『女子新聞欄』に「趙清閣千里訪友（趙清閣、友を訪ねて千里をわたる）」という記事があり、「河南で最も努力している女性運動家の趙清閣は、平生『婦女周刊』と『她』隔週刊の編集をしており、顕著な業績をあげている。もうじき、本社の同人を慕ってわざわざ上海まで訪問してくれるとのことだ。『近世音楽史』を翻訳し、すでに女子書店に原稿を送ったという」としている。⁽⁴⁾趙清閣は黄心勉宛の手紙ですでに上海行きについて書いていたから、訪問前に消息が記事になったのだろう。十月、趙清閣は南京と上海の両地を訪れ、のちに「京滬遊歴記（北京上海遊歴記）」という文章を『女子月刊』に連載している。

高天星、高黛英、陳阜東の編集による『趙清閣文藝生涯年譜』の一九三二年の記載には「七月、高校卒業。河南大学中文系で聴講。作家の葉鼎洛と知り合う。同じ頃、河南救済院貧民小学校で教鞭をとり、働きながら学ぶ。貧民小学校で下層階級の群衆や貧しい孤児に接触し、貧富の差の大きい罪惡に満ちた社会への嫌惡が増したため、革命に漠然とした憧れを抱き、ペンをとって戦闘に加わろうとした。この時、『新河南報・文藝周刊』、『民国日報・婦女周刊』の編集を務め、『河南民報』にもしばしば投稿していた」とある。實際には、趙清閣は一九三二年には河南開封で編集活動をしていた。それが『河南民報』の『女子文藝』副刊である。趙清閣は晩年に「姚名達与女子書店（姚名達と女子書店）」という文章の中で「女子書店は一九三三年の早春、おそらく一月か二月に創立された。當時私は女性の文化活動に熱中しており、開封の『河南民報』上で『女子文藝』を週刊で編集していたが、タイトルデザインを老作家の葉鼎洛が描いてくれたことは特筆すべきである。葉鼎洛は原稿もいくつか提供してくれた。このほか、私は『民国日報』の『婦女周刊』と『鄭州日報』の『她』隔週刊を編集していた」と書いている。半世紀前のことを追想した文章なので、事実と食い違う部分がある。以下詳しくみていこう。

早くも一九三〇年十二月八日、『河南民報』に「女子文藝」に特化したコラムが設けられるという告知が載っている。「河南の女性文藝家たち！本紙は各所の女性同志から、自分の作品を本報の副刊に投稿したいという書信を受け取っています。女性同志たちの文学への情熱を高めるため、毎週一度女子文藝の頁を設けて女性文学を大いに広める予定^(六)です」。この後、この新聞の多くは失われてしまったので、本当に「女子文藝」頁が組まれたかどうかは知ることができない。

一九三二年十一月十五日、『河南民報』に趙清閣の編集による刊行物が現れたが、そのタイトルはまさに『女子文藝』であった。「姚名達与女子書店」がいうような「週刊」ではなくて隔週刊であり、連絡先は自由街救済分院の本

刊編集処となっている。この時の趙清閣は高校を卒業したばかりの女子学生だったが、彼女がどうして『河南民報』の副刊編集として抜擢されたのだろうか。それについては『河南民報』と趙清閣との縁について明らかにせねばならない。「文苑耕作漫憶」という文の中で、趙清閣は「私は押韻した新詩を『河南民報』副刊に思い切って投稿したのだが、なんとそれは数日後に掲載され、原稿料までもらえた。降ってわいたような喜びだったが、私のみならず校長や同級生もみな祝福してくれた」と振り返っている。とすれば、一九三二年六月一九日『河南民報・民報副刊』掲載の新詩「宇宙的寂寞（宇宙の寂寞）」（署名は清閣）が趙清閣が初めて新聞雑誌に投稿し、公開した詩作ということになる。このあと、彼女は陸統と『河南民報・風雨』副刊に「空虚的心（空虚な心）」「悵惘的詩（失意の詩）」などの詩を発表しているから、開封の文壇ではある程度名が知られていたと言えるだろう。『河南民報』の別の副刊『風雨』の編集者、劉如水が記した「似水流年——風雨二周年紀念的話（流れる年月——風雨二周年紀念のことば）」によれば、一九三二年七月『風雨』が創刊された時、劉如水は所用のために帰省する必要があり、その間の二期ほどについては「出かけるときに手持ちの原稿を清閣に渡して代わりに編集してもらった」という。このような背景があったとすれば、『河南民報』が趙清閣に『女子文藝』の編集を依頼したこともそれほど不思議ではない。

『女子文藝』創刊号（第一期）は全部で四篇の文章を載せているが、その半分は趙清閣自身によるものだ。一つは発刊のことは「写在卷頭的幾句話（卷頭によせていくつか）」、もう一つは「隨筆——零細集之十二」である。「写在卷頭的幾句話」では、初めに文藝とは暇つぶしでもなければ少数の人々のための贅沢品でもなく、社会全体が所有するものであり、「大衆の喉であり、社会の呼び声なのだ」と明言している。作者は続けて、人類は文藝の力によってこの社会を自然の軌道にのせて前進させることができるが、この人類とは男性も女性も含むもので、近代女性性すでに差別と圧迫を帯びた社会の偏見から解放されており、自分たち自身の力を発揮できるのだと説く。『女子文

『藝』創刊の主旨は両性の平等という理念に基づいており、文藝に力を尽くす女性が文字によってその力量を用い、社会のために責任を尽くせるようになるものだ。趙清閣はまた、「沈黙と抑圧に行き当たったときは、言いたいことを本誌で言い尽くしましょう。物を言う前には何か指摘されるかも、などと顧慮しない勇氣を持ち、言い終わったら、指摘を求める謙虚な心を持ちましょう。これが本誌の態度です」と付け加えている。『女子文藝』は新文藝建設に力を尽くそうとする全ての女性の書き手を歓迎し、女性のためのスペースを確保するために、男性の投稿は受け付けなかった。しかし実際には、創刊の過程で特殊な形で参与した男性がいた。巻頭には著名な現代作家兼画家の葉鼎洛がイラストを描いており、趙清閣は「写在巻頭の幾句話」の文末で謝意を表している。このイラストの右側には「女子文藝」の四文字がレタリングされ、左側には蠟燭を灯して読書を楽しむ少女がシンプルな線で描かれている。めりはりが効いた構図も美しく、素材ながらバランスの取れたデザインになっている。第二、三期では別のデザインが用いられ、少女が窓辺に俯いて花を愛でる絵柄となったが、これもまた葉鼎洛の手になるものだ。

第二期の『女子文藝』は十一月二十九日に発行され、全部で五篇の文章を載せている。趙清閣の「介紹中国現代女作家家的創作（中国現代女作家の創作紹介）」は『婦女旬刊』に掲載された尹庚「中国現代的女作家（中国現代の女性作家）」をふまえて丁玲、冰心、盧隱、蘇雪林、馮沅君、吳曙天などの女性作家の作品を紹介したものだ。「編後雜話」の中で、趙清閣は『女子文藝』が実行しようとする三つの計画について述べている。一つ目は女性の社会にお



ける地位を明らかに説明し、この問題について認識を持っていない読者が、女性の問題を社会の大きな問題として捉えるように導くこと。人類社会には男女双方の参与が欠かせず、社会の進化と発展のためには必ずこういう基礎——男女が同じ水平線の上で平等に発展すること、同等の権利と義務を有することが必須であるからだ。二つ目は「刺激的な文学で従来黙り込んでいた女性を啓発し、強権によつて萎縮させられきた彼女たちの純粋な心を励ます」こと、目を塞がれていた女性たちを目覚めさせ、全ての女性たちに自覚を促し、自分たちの責任を知り、失われてきた女性の権利を奪回することであり、三つ目は「女性たちが実際に相続権を獲得し、実際に参政し、実際に戦線に赴くようにすること」だった。「女性の解放は自分自身の努力によらねばならない。男女平等という優勝旗の獲得は、全て自分たちの頭脳にかかっている」。以上三つの計画から、趙清閣はこの刊行物を単なる文藝の園地とみなしたのではなく、女性が受けている差別と不公平に対して文字を武器として抵抗の声をあげ、相続権や参政権など、女性が男性と同様の権利を獲得できることを願っていたのだとわかる。社会における無知蒙昧な女性を覚醒させるため、刺激的な文章で警鐘を鳴らし、長い間女性を縛ってきた封建思想の鎖を除こうとしたのだ。

趙清閣のこのような構想は実践を伴うものでもあった。一九三二年十二月二九日には『女子文藝』第三期が発行されたが、巻頭文は趙の「婦女的参政運動（女性の参政運動）」で、女子の参政権を主張し、現代女性の参政運動を鼓舞しようとするものだ。残念ながらこの三つの計画は最終的に完成することはなかった。『女子文藝』は第三期で終わりになってしまったからだ。停刊の原因は、まさにこれらの「刺激的な文字」が保守的な旧勢力とは相入れなかったからではないだろうか。もちろん、一九三三年二月五日に創刊された『河南民国日報・女子文藝』週刊（のちに『婦女週刊』に改名）と同年に出た『鄭州日報』の『她』隔週刊は、『河南民報・女子文藝』の意志を継ぐものと考えることができる。

二、『中央日報・教育と文化』 明らかにされなかった編集長

一九四〇年三月一日、重慶『中央日報』の付録として『教育文化』という刊行物が出された。問い合わせ先は『本報教育文化専刊編集室』とされており、編集者が誰なのかはつきり書かれてはいない。三月二日、姚蓬子編集の『新蜀報』副刊『蜀道』第六一期のコラム「文藝簡訊」が「趙清閣が北碚から重慶にやつてきて『中央日報』の『教育文化』専刊の編集をするようになった。第一期は昨日出版されている」と簡単に報道している。一九三八年三月、中華全国文藝界抗敵協会（略称「文協」）が武漢で成立した後、趙清閣も姚蓬子も「文協」の活動に参加していた。やがて、二人は前後して重慶に移り、抗戦文化工作に従事するようになる。一九四〇年一月二七日晩、姚蓬子は重慶の匯利飯店で『蜀道』第一回座談会を開き、どのように作家の戦時生活を保障するかについて討論した。老舍、趙清閣、胡風、鳳子、陽翰笙、華林、沙雁、王平陵、臧雲遠、高長虹、陳紀滢などの作家が招待されて出席している。同日、趙清閣は新詩『寄友人（友人に寄せて）』を『新蜀報・蜀道』第二七期に発表した。まもなく、姚蓬子の短篇小説「一個哨兵（ある哨兵）」が趙清閣編集の『彈花』第三卷第三期に掲載されている。ここから、趙清閣と姚蓬子は重慶時代は関係がよく、お互いの刊行物に投稿しあい、それぞれの編集をサポートしていたことがわかる。趙清閣と姚蓬子がお互いをよく知っていたことから考えて、上述のコラムが提供する情報には間違いないだろう。『教育文化』の創刊後まもなく、作家の華林が中国には文化新聞的な日報が必要である、国が人材を求める態度に応じるべきだという提案をした。「国のために人材を求めるといふ任務を实践すれば、この刊行物は素晴らしい光を放つだろう。才能ある人に対して、本刊はその意見を發表し、その専門的な學術論著を發表する場所を提供する。また彼らの始める事業の成就のために協力し、声援を惜しまない。」同期に掲載された「編者致答華林先生（編者による華林先生への答え）」は、「このことについて、編者は以前前漢の蕭何、韓信を推薦す」という故事に材を

とって脚本を書いたが、これは政府当局の反応をみようとしたものだった。効果がどうなるかは今のところまだわからない。ただ今後この方向を続けたいとは考えている。このようにしなければ建国の成功につながらないからだ^(二二)と言う。また、「現在に至るまで、本刊はたった一人で動かしている。編集者以外に仕事をしてくれる者はいないのだ^(二三)」とも書いている。一九四〇年前後、趙清閣は『薦賢』という歴史劇を書いており、一九四一年五月に重慶『文化新聞』の文藝副刊『文藝青年』第一巻第三期に発表している。語られているのはまさに「蕭何が韓信を推薦した」物語だ。これもまた、『教育文化』の編集者が趙清閣だったことの証拠となるだろう。本誌は最初『教育文化』というタイトルだったが、一九四〇年四月一日、第十一期をもって『教育与文化（教育と文化）』に改められ、連絡先も「本報教育与文化専刊編集室」に改められている。最初は三日に一回の刊行だったが、同年五月八日の第二期からは週刊になった。『教育与文化』というタイトルだった時間のほうが長いので、以下は統一してこのタイトルを用いることにする。

「創刊詞」（署名は編者となっている）の中で、趙清閣は本誌の主旨についてはつきり述べている。「教育と文化については、随時すべての動態について社会に報告すべき必要がある。前方だろうと後方だろうと、農村であろうと都市であろうと、およそ教育と文化に関わる消息は、広く集めて統一的に、十分に紹介するべきである。そうすれば社会に教育と文化の活動状況について知らせることもできるし、のちに史料を編纂する際の一助にもなるので、この任務の意義と価値を見過^(二四)してはならない」。純文藝に属する副刊ではないので、本紙を「少しでも活気に満たした^(二五)」様子にするため、「通訊や紹介を重視する以外に、客観的な批評や、専門的な論著を載せるコラムを作ることにした」。本紙は特約の原稿以外に自由投稿も歓迎していたのだ。「消息」「通訊」「論壇」「批評」「紹介」「特写（ルポルタージュ）」などのコラムがあり、掲載された文章はおよそ三種類にわけることができた。まずは教育、文化、出

版に関する消息や短い紹介、公文書など。「中華職業教育社二十九年工作計画大綱」などがこれに当たる。二つ目は文化、教育について論じる論稿。禾火の『文藝奨助金の支配問題（文藝助成金の配分問題）』、火水の『電影教育と戲劇教育（映画教育と戲劇教育）』などである。三つ目は戯劇、映画、図書についての評論で、とりあげられた作品には丁玲の『河内一郎』、曹禺の『蛻変』、老舍の『駱駝祥子』などがあつた。趙清閣本人は「清閣」「青谷」「趙天」などの筆名で、「北碚漢戲観後感（北碚漢戲の感想）」「對於出版界計算文章字数的の一点牢騷（出版界の文字数の数え方についてのちょっとした不満）」「雷梦娜」観後感（『ラモナ』感想）」「對於邵力子先生出使蘇聯的感想（邵力子先生がソ連大使となったことについて）」「軟体動物」観感（『軟体動物』感想）」「疏散区仍須予公務員以人身保障（疎開先でも公務員に人身保障を与えるべきだ）」といった文章を発表した。また彼女は人脈を利用して、朱双雲、唐性天、王平陵、隋樹森、老向といった友人に投稿を依頼している。

趙清閣は「文苑工作漫記」の中で『彈花』が停刊に至った過程を以下のように述べた。「私と、教育部が編集印刷した『学生之友』（責任者は許心武）との間でいざこざが起つた。原因はこの雑誌が青年学生思想の左傾問題について叱責したのに私が反感を覚えたからだ。『鉄公』というペンネームで批判したところ、官公庁に悪い印象を与えて補助金を取り消されてしまった。正中書局も売ってくれようとしなくなったので、停刊せざるをえなかったのである」^(四)。実際には、この「鉄公」が書いた「評『学生之友』創刊号（『学生之友』創刊号を評する）」が発表されたのは一九四〇年七月二十四日『教育与文化』第二十九期だ。『学生之友』が世に出たのは同年の六月十五日で、創刊号には梁実秋の「対青年談思想自由問題（青年が思想の自由を語る問題について）」などが掲載されていた。趙清閣はこの雑誌が「学生」と「青年」をいっしょくたにしているが、学生に向かって「左傾」「右傾」などの問題を語るのはいくなく考えたのであつた。八月十五日、許心武は『学生之友』第一巻第二、三期合併号の「編後記」におい

て、『鉄公』先生の見解はまるきり誤っている^(二五)』と反応し、『教育与文化』は余計なものだとあてこすった。そのあと、趙清閣は「為鉄公駁『学生之友』二三期合刊的『編後記』」（鉄公のために『学生之友』二三合併号の「編集記」に反駁する）（『彈花』第三卷第六、七期合併号掲載）を書いたが、その中の第四点として『教育与文化』停刊の問題に触れている。「また、それが「停刊」するかどうかはまた別の問題だ。この編集者は鉄公を恨んでいるからといってその怒りを雑誌に向け、皮肉をいうべきではない^(二六)」。許心武は教育部の教科用図書編集委員会の主任委員であり、教育部教科用図書編集委員会の編集員だった趙清閣は彼の部下に当たる。彼女が「鉄公」という筆名を用いて本名を名乗らなかったのは、憚るところがあつたからだろう。許心武はもしかしたら「鉄公」の正体を知らなかったかもしれないが、『教育与文化』が趙清閣の編集によるものだということは知っていたはずだ。そこで趙清閣と『教育与文化』に怒りを移したと考えるほうが自然だろう。このように時間の流れから考えると、『彈花』より『教育与文化』こそが「官公庁の印象を悪く」してしまつて停刊の憂き目をみたのだと思われる。

純文藝刊行物だった『彈花』に比べると、総合的な性格を持つ『教育与文化』は多少見劣りする。同時に、これは国民党中央機関報であつた『中央日報』に附属するものだったため、いくらか官公庁的な性格を帯びていた。刊行物の性質や背景などの影響により、趙清閣が編集をしていた際にも多くの制限があり、得意とする文藝編集の才能を十分にいかすことができなかった。彼女は明らかに『彈花』により多くの精力と心血を注ぎ、抗戦期の著名な刊行物に育て上げたのである。『教育与文化』はたった四ヶ月しか維持できなかったが、抗戦の文化教育事業に一定の貢献をなしたとげた。掲載された消息、通訊、公文書などは、当時の教育や文化研究のための一次資料となりうるもので、「のちの史料編纂を助ける」という目標を実現している。たとえば一九四〇年三月十日第四期には『彈花』第三卷第三期が「すでに今月一日に出版された^(二七)」という消息を伝えていて、該当する『彈花』が出版されたのは、奥

付けに書いてある二月一日ではなくて三月一日だったということがわかる。このほかに、『教育与文化』は抗戦文藝運動にも一定の貢献をしている。「文藝奨助金の支配問題」「對於出版界計算文章字数的一点牢騷」はみな当時の「作家生活保障運動」に应じて発表したものだ。

三、趙清閣の筆名新発見についての考証

『中国現代文学作者筆名録』『中国近現代人物名号大辞典』『中国近現代人物別名詞典』などの資料は、趙清閣が本名以外につかった筆名（別名）として清閣、趙天、青谷、清谷、人一、騷人、鉄公を挙げている。筆者は『女子文藝』『教育与文化』などを調査し、趙清閣が少なくとも以下の八つの筆名を用いていたことを突き止めた。

(一) 滌凡 『女子文藝』第一期に「清閣」の署名で「随筆——零碎集之十二」が載せられているが、第三期には「詩人的漫筆——零碎集之十四」があり、署名は「滌凡」となっている。「零碎集」は趙清閣による散文シリーズだが、今のところ上記の二篇と『月夜随筆——零碎集之二十五』しか確認されていない。一九三五年十一月から翌年の一月まで『河南民報・風雨』に「滌凡」の名前で連載された「窮人」という小説がある。校勘したところ、一九三五年に趙清閣作品集『早』が収録した同名の小説と基本的に同じプロットであった。^(二) ここであらためて「滌凡」とはすなわち趙清閣であることを表明しておく。一九三六年初、趙清閣は「滌凡」を用いて『河南民・風雨』に「断頭台」という小説を連載している。また一九四〇年四月二八日、趙清閣は重慶の『中央日報・教育与文化』第二十期掲載の「岳飛」観後後、感到「最後関頭」之需要演給外賓看（『岳飛』を観て、「最後の正念場」の段を外国人客に演じてみせる必要があると感じた）で再び「滌凡」と署名している。

(二) 涕克 『隨筆——零碎集之十二』の末注に「B埠K院にて記す」とあるが、「K院」は明らかに河南省の救

済院を指している。また『詩人的漫筆——零碎集之十四』の落款には「K院にて記す」、詩歌「淨歌——獻給你（清い歌——あなたに捧げる）」の末注には「旧作をK院にて改める」とあり、この三篇の作者はおそらく同一人物であろうと思われる。一九三二年八月二十六日、『河南民報・風雨』に「涕克」による新詩「慈的失意歌（慈の失意の歌）」が掲載された。この詩は「悵惘的詩」「勝利」「当我抓住了新的靈魂（私が新たな靈魂を掴んだ時）」「孤新泪——祖母逝世憶【ママ】想曲之三（新たに流す孤独な涙——祖母逝去の追想曲三）」とともに趙清閣の新詩の代表作であり、周啓祥が編集した『三十年代中原詩抄新編』に選ばれている。周啓祥は趙清閣の同郷であり文友でもあったから、彼女の筆名を間違えるとは思えないし、おそらくは編集の過程で趙清閣本人の許可をとったものと思われる。趙清閣は「涕克」の名で短篇小説も発表していた。たとえば一九三四年の「鶯鶯」^(一九)や一九三五年の「戦区裏の席公館（戦区の中の席公館）」^(二〇)など。

(三) 凡 この筆名はおそらく「滌凡」を縮めたものだろう。主に趙清閣が編集していた南京『婦女文化』第一卷第一期（つまり創刊号）および第二期で発表した「社評」の文章で使われている。この二期の「社評」は全部で六篇あり、署名はすべて一文字で、それぞれ凡、清、僕、輝、凡、文となっている。創刊号の「婦女文化与救亡——代発刊詞（婦女文化と救亡——発刊詞にかえて）」の署名は趙清閣、楊郁文となっている。楊郁文は趙の親友で、二人で一緒に『婦女文化』を立ち上げ、発行人となったのだった。この時雑誌は二人で切り盛りしていたので、「社評」もこの二人によって執筆されたのだろう。名前から推断するに、「文」は楊郁文で「凡」「清」は趙清閣だと思われるが、「僕」「輝」が誰の筆名なのかは今後の考証が待たれる。

(四) 清 「清」は明らかに「清閣」を縮めたものだ。一九三六年八月の『婦女文化』創刊号に「女性為什麼不

可以愛女性？（女性はなぜ女性を愛してはいけないのか）」という「社評」が掲載され、文末に「清」と署名されていた。この文章は女性間の同性愛についての文章に対して書かれたもので、「愛とは元来広汎なもの」であり、女性には一切の人を愛する権利があると説く。女性には団結が必要で、同性同士が仲良くしたところで責められるべきではないというものだ。女性は「男性を愛するためだけに生まれてきたのではなく」、愛の対象を自由に選べる、とされる。むしろ作者は女性「同性愛」を主張しているのではなく、ここでいう愛とは実際には同性間の友情である。この文章は趙清閣による女性の運命への観照とシスターフッドへの関心とを示しており、作者の女性観を考察するために重要な文献と言える。

（五）

青蒂 『婦女文化』創刊号に「青蒂」の署名で発表された短篇小説「鳳」がある。上海鉄流書局が一九三七年に出版した趙清閣の短篇小説集『華北的秋（華北の秋）』にこの小説が収録されているので、「青蒂」は趙の筆名であることがわかる。一九三四年五月十一日の『河南民報・民報副刊』第二二六期にはすでに上海から寄せられたという散文「艾霞追悼会在上海（上海での艾霞追悼会）」が「青蒂」の署名で発表されている。趙清閣の回想によれば、一九三四年、彼女は上海美専で学びながら天一映画会社で働いており、『明星日報』に宣伝文を寄稿していた。ここから、筆者は「艾霞追悼会在上海」の作者も趙清閣に他ならないと考える。文中にはこんな一文がある。「午後二時、私は雨の中、はるばる菜市路から西藏路まで、寧波同郷会に参加しにいった」。当時の上海「美専」はまさに菜市路（現在の順昌路）にあった。艾霞の死は当時の文化界に衝撃を与え、趙清閣はこの文の中で彼女の哀悼の情を表明し、「艾霞の死は社会や映画界の損失にとどまらず、わたしたち女性全体にとつての損失だ」と書いた。このほか、一九三五年十一月『女子月刊』第三卷第十一号に掲載された新詩「送別」でもこの筆名が使われている。

(六) 若青 この筆名は「青蒂」に似ている。一九三六年九月『婦女文化』第一卷第二期に載せた「新社会的蘇聯婦女(新社会のソ連女性)」ではこの署名が用いられている。同年十一月、武漢の『文藝』第三卷第五期は、趙清閣の小説「華北的秋」の次に『婦女文化』第二期の目次を載せており、趙清閣「白鷺洲的釣魚(白鷺洲での魚釣り)」、青「新社会的蘇聯解放婦女之近状(新社会のソ連における婦女解放の近況)」などが連ねられている。この雑誌の編集者である胡紹軒と羅韶蕪は趙清閣とは協力関係にあつて原稿を融通しあつていたから、この目録は趙清閣自身が宣伝のために提供したものであろう。「新社会的蘇聯解放婦女之近状」は「新社会的蘇聯婦女」の元々のタイトルだったに違いない。最初は「青」だった署名がのちに「青蒂」に改められたのである。「白鷺洲的釣魚」も同じような経緯で、最終的に発表したときは「白鷺洲釣魚」というタイトルになり、署名は「青谷」とされた。

(七) 天我 一九四〇年三月二十二日、重慶の『中央日報・教育と文化』第八期の「ルポルタージュ」欄に本紙記者が「天我」という署名で「記教部音楽会(教部の音楽会について記す)」という記事を書いており、文中で河南教育庁長の魯蕩平が「本紙のために旅中での見聞を書いてくれると約束してくれた」と言っている。前に述べたように、趙清閣は「編者致答華林先生」で本紙は「編集者以外に仕事をしてくれる者はいないのだ」と書いているのだから、「天我」は趙清閣であると容易に推測できる。まもなく、趙清閣は再び「天我」というペンネームを用いて「文協」の第3回年会についてのルポルタージュ「文藝大宴会」を執筆し、四月十日の第十四期に投稿した。

(八) 中明 一九四六年九月十一日、王進珊編集の『申報・文学』が「中明」という著者の「文人友情与政治關係(文人の友情と政治の關係)」という文を掲載している。校勘してみたところ、この文章は一九四七年二

月一日に『文藝与生活（文藝と生活）』第四卷第一期に掲載された趙清閣「友情与政治（友情と政治）」とはほぼ内容が同じであることがわかった。ここから「中明」が趙清閣の筆名であることがわかる。趙清閣が友情を論じたこの文章を二度発表したことから、彼女が政治的立場を超えた純粋な友情を重視していたことがうかがえる。

終わりに

趙清閣は一九三六年に「我創作的動機（私の創作動機）」の中で「小学六年生のとき、クラスの『壁新聞』を作ったことが私と文学との縁の始まりだった」と書いて^(三三)いる。「文苑耕作漫憶」では少し異なっており、「小学五年になったとき、孫という姓の国語の先生が私の成績を認めて壁新聞を作らせてくれた。これは光栄かつ厳しい任務だったが、実のところは原稿を書くのは先生で、私はただそれを清書し、挿絵をつけただけである」と^(三四)書いている。もしも壁新聞作りが趙清閣の「文学との縁の始まり」であり、『河南民報・風雨』の代理編集が臨時手伝いという性質のものだったとすれば、『河南民報・女子文藝』の編集こそは趙清閣の編集生涯の真の開始であり、一人の編集者の誕生を正式に告げたものだったといえる。『河南民報・女子文藝』は趙清閣が編集した初めての期刊だっただけでなく、おそらくは河南省の、ないしは中原地区の最も早い女性解放の専門的刊行物であり、現代女性報刊史に一定の位置を占めるものだ。また、半年にも満たないうちに停刊になってしまった『中央日報・教育与文化』の影響力は『彈花』には及ぶべくもないが、編集者だった趙清閣は官公署の刊行物への圧力をはねのけ、文化的動態を適時に紹介し、抗戦教育や文化事業のために史料を残したいと考えたのだった。同時にまた鋭敏な批評で社会的事件に注目し、新書・新作を追い求め、さらに勇氣を持って「ちよつとした不満」を発表し、真実を語つたために停刊の憂き目に

遭ってしまったのである。清閣、趙天、青谷、清谷、人一、騷人、鉄公という七つの筆名のほかに、趙清閣は少なくとも滌凡、涕克、凡、清、菁蒂、若菁、天我、中明という八つの筆名を使って文章を発表していた。これらの筆名が知られていないために、「女性為什麼不可以愛女性?」「鶯鶯」「戦区裏的席公館」などの散文や小説がまだ学術界の視野に入っていないことは遺憾と言わざるを得ない。

注

- (一) 趙清閣「一定会受鼓励而振興起来」『女子月刊』一九三三年第一卷第五期。
- (二) 趙清閣「婦女或即会被你們的刺激而覚悟」『女子月刊』一九三三年第一卷第五期。
- (三) 「趙清閣千里訪友」『女子月刊』一九三三年第一卷第七期。
- (四) 高天星、高黛英、陳阜東「趙清閣文藝生涯年譜」『新文学史料』一九九五年第三期。
- (五) 趙清閣「長相記」、学林出版社一九九九年版、一九一〜一九二頁。
- (六) 「本報啓事三」『河南民報』一九三〇年十二月八日第一版。
- (七) 趙清閣「滄海泛憶」香港生活・讀書・新知三聯書店一九八二年、八七頁。
- (八) 劉如水「似水流年——風雨二周年紀年的話」、一九三四年七月一日『河南民報・風雨』第一卷第七期。
- (九) 趙清閣「写在卷頭的幾句話」一九三三年十一月一日『河南民報・女子文藝』第一期。
- (一〇) 趙清閣「編後雜話」一九三三年十一月二九日『河南民報・女子文藝』第二期。
- (一一) 華林「對於『教育文化』專刊之建議」重慶『中央日報』一九四〇年三月一九日第五版。
- (一二) 編者「編者致答華林先生」重慶『中央日報』一九四〇年三月一九日第五版。

(一三) 編者「創刊詞」重慶『中央日報』一九四〇年三月一日第五版。

(一四) 趙清閣『滄海泛憶』香港生活・讀書・新知三聯書店一九八二年版、九七頁。

(一五) 編者「編後記」『學生之友』一九四〇年第一卷第二、三期。

(一六) 趙清閣「為鉄公駁」『學生之友』二三期合刊的『編後記』『彈花』一九四〇年第三卷第六、七期。

(一七) 「彈花第三期出版」重慶『中央日報』一九四〇年三月一〇日第六版。

(一八) この小説にはいくつかのバージョンがあり、作者はこの二つ以外にも「窮人」を「餓」と書き直して短篇小説集『華北の秋』（鉄流書局一九三七年出版）に収録している。

(一九) 一九三四年十二月九日、一〇日、一日に上海『晨報・晨曦』に連載。

(二〇) 一九三五年六月刊『女子月刊』第三卷第六期。

(二一) 清「女性為什麼不可以愛女性？」『婦女文化』一九三六年第一卷第一期。

(二二) 菁蒂「艾霞追悼会在上海」『河南民報』一九三四年五月一日第八版。

(二三) 趙清閣「我創作的動機」『文藝』一九三六年第三卷第一期。

(二四) 趙清閣『滄海泛憶』香港生活・讀書・新知三聯書店一九八二年版、八六頁。

(二五) 黄天弘「民族主義視域下婦女解放的媒体言説」（『中州學刊』二〇一八年第十一期）は趙清閣が編集した『河南民報』が『河南民報』が「河南省で最も早い女性解放宣伝のための報刊である」とするが、明らかに『河南民報・女子文藝』が『河南民報・婦女週刊』より早く出たことを見落としている。

（きんでんしょう・揚州大学副教授）

（はまだまや・神戸大学教授）